

# 医芸伴壇



(千葉) 秋葉 琢 磨

一年を生きて会へたる残る虫  
照紅葉母校に建ちし記念館  
立冬や突然死なる骨納め  
冬ざれや医の道ますます難しく  
庭の柿持つて来たよと里の人

(長野) 有 泉 七 種

やどり木に風のきてある小春かな  
茶の花の芯ほこらかにひらきけり  
病窓のそとにひろがる時雨かな  
短日のたすきをせかす風の音  
大綿のただよふ暮色ふかめけり

(浜松) 岩 本 漂 人

冗舌のツバメの下や老一人  
カルガモの天下となりし夏の河  
百日紅色あせくればコガモ来る  
長野県戸隠森林公園 司  
いちいの実喰べつくすまでマミチャジナイ  
戸隠の時雨上りをゴジユウカラ

(栃木) 川 村 章 子

街に来て新年寂か陽が祝ふ  
高層の灯の点く家は祝ひ膳  
都電ことごとげぬき地蔵初詣  
狼の声で吠えたる凍ての街  
轟音と歌舞伎メイクや三国志

(東京) 小 南 丁 字

大関へ“安馬”会心の紅葉取  
台湾の世界一タワー天高し  
総裁選五人熾烈な秋祭り  
ノーベル賞日本の名譽あきざくら  
入れ変る蜻蛉の景色杭の先

(東京) 堺 雄 子

土用波砕くる飛沫の新しき  
苔むせし原生林や夏日影  
向日葵や笑みのほころぶ表彰台  
苑の岩青苔むせり秘めし歳  
秋の蝉大樹と並ぶ石灯笼

(東京) 篠 田 那 珈

台風が街の雀をつれ去りぬ  
予防接種済まし菊見に誘れる  
義経の三倍生きて明けの春  
福寿草吾れに過ぎたる天寿かな  
お山の大将たりし日も在りき返り花

(東京) 田 村 豊 幸

稲雀彼方に遠く筑波山  
百舌の声少年の頃父母も居た  
マロニエの押葉に秘めし西の旅  
蟋蟀の声も親子か兄弟か  
秋日暮桃色雲に金の星



福富 清子 (東京)

(新潟) 中村 雄彦

部屋にある鏡の中の雪の富士  
二人来て腕より大き大根干す  
魔屋の足場に二羽冬鳥  
足曳いて犬曳きをるや秋の晴れ  
サーファーの紅き足裏秋の暮

(長野) 橋本 勝彦

紅葉描く思いきりよき黒き幹  
鈴台奏命の讃歌菊の前  
どら焼や香もよく仕上げ冬立ちぬ  
水を切る小石きらめき冬に入る  
初雪や提灯屋流の書に挑む

(東京) 西垣 茂

蝉時雨昨夜の雷雨夢のよう  
盆栽に花かと思れば散り紅葉  
ひぐらしの鳴き声遙か目を瞑り  
空碧く紅葉を散らす風もなく  
一片の白雲遙か山紅葉

(兵庫) 廣辻 逸郎

菊臈ポンポン船の通る宿  
紅葉の影濃く落とし火灯窓  
鴨鍋に似つかめ話葱おどる  
歳のこと忘れて妻の年用意  
もつけない海鼠好みし兄おとと

(青森) 福士 盛大

雪しまき怒涛の中の日本海  
深雪晴お岩木山や厚化粧  
冬帽子深くかぶりて年隠す  
新年のめでたさ隠す不況かな  
風花や妖精ごとく舞い踊る

(東京) 福神 規子

歳晩の海に来てをりいのちなが  
空よりも海のやすらぎ十二月  
絵硝子はセントニコラス暖炉燃ゆ  
べール深き降誕祭の一信徒  
竜の玉見せたき人に一つ摘む

(東京) 福富 清子

木の葉髪八百比丘尼を羨やます  
不夜城に籠りて知らず雁の声  
咳小さく母の来てみし父兄会  
冴ゆる灯に権書で写す師の句集  
塵の身や四温日和に游はむか

(東京) 初木 秀穂

数へ日の童歌などありしかな  
数へ日に数へ年をも思ひけり  
社会鍋人聞かまいが声喧らし  
歳晩の街摺り足の托鉢僧  
クリスマスカード飛び出す聖家族

(青森) 三上忠英

父からのぶつきらぼうなお年玉  
しんしんと雪降る中の能舞台  
日向ぼこ嫁が本音をほろり吐く  
大雪は神の恵みと思いきり  
怨念はさらりと捨てて雪見酒

(広島) 渡辺晋山

道路端主婦の売りある秋刀魚かな  
埋立てを止めよと鞆の百合鷗  
冬日向ボーンヨを産みし崖の家  
木枯らしを連れもどしけり年の暮  
鳶の輪や小春日和の天廻る

佳画について(福富さんのお便りから)

元旦、ひとりで大田区の日蓮宗総本山  
池上本門寺へ初詣で。本殿へ向かう急な  
坂は、加藤清正が献上したといわれる立  
派なものです。これを「男坂」というわ  
けではありませんが、近年その脇に「女  
坂」が造られ、そついつわけで本来のも  
のを「男坂」として詠んだ次第です。

### 医芸伴壇・歌壇・柳壇の締め切り

次号は「春季号」です。4月6日(月)が締め切りです。  
お忘れにならないようにお願いします。

挨拶文

大黒 勇

旅はなさけ、恥はかきずて、宿屋に著きて先づ飯盛女の品定め、  
水臭き味噌汁すすりながら、「ここに遊君ありや」といへば、「ど  
りまする、片田舎とて侮り給はば思はぬ不覺を取り給ふべし、  
などいふ今の世の中に旅といふもの可愛い子にはさせまじき  
者なり。」

(正岡子規 旅)

旅は遣つれ世は情、宿屋に著きて先づ菓子品の定め、濃き茶を  
喫しながら、「ここに夜遊ぶ所ありや」といへば、「ござりまする、  
與話情の發祥の地なれば都のお方とて不覺を取り給ふな、など  
いふ今の世の中に旅といふもの親しき友とはする者なり。」

狂歌

大黒 勇

巢鴨より川口に行く乗換の田端跨線橋は往復同方向

これだけの人が出入りしこれだけの顔があるなり驛の改札  
長道中毎日電車に乗りてめて初めて気づく景色もあるなり  
込む車内股を擴げて坐す客はいんきんたむしの患者と見るべし  
階段を一段置きに上り下りしたる昔の我今いつじ

# 医芸歌壇



着ぶくれ

千葉 蒲谷 玲子

枯葉落ち虚空を掴む冬の木に朝日凜凜枝ひろげゆく

冬空を赤く飾れる柿の実は鳥に残せしひとのなさけか

高齢の患者は付添い必要と従つ吾れも後期高齢者

着ぶくれし患者立て込む待合室医師といつ日の吾れにもありき

検査前夫の欠食昨日今日あなたの方まで食べてあげましょ

秋から冬へ

東京 小松 安彦

五十年前には秋の咲きてみし園の庭には揺れるコスモス

純白のさざんくわの花近づけば牡丹の花の如く見えくる

東から二つの星が昇りくるアルデバランとカペラと知りぬ

日没の後に金星木星と旧曆三日の月を見てゐる

東京を冬の嵐が通り抜け桜並木は裸木となる

握り飯

横浜 助川 信彦

青森県医師会報に記事ありて肉親の愛の尊さを説く

汽車に乗れる丸刈り少年寂しげなりやがて握り飯を取り出し食む

握り飯を旨さうに食べ三個目に少年俄かに涙し咽ぶ

コンビニの握り飯にて涙する少年あらじと言ふにもあらず

携帯ビデオDVD録画ありと言へどわが子は護れ世の親たちよ

宇治・平等院

神奈川 武井 忠夫

淀川の清き流れの央に集つ都鳥とつユリカモメ群

極楽の浄土夢みて成りしとつ阿字池に映ゆ鳳凰の堂

鳳凰の鴟尾対い立ち阿字池に雅びに映えし阿弥陀中堂

鳳凰堂の壁間に群れて奏で舞つ五十余体の菩薩木像

阿弥陀困り楽器抱きて雲間舞つ姿ゆかしき群像菩薩

(雲中供養菩薩)

東京 田村 豊幸

古里の寺の銀杏の実に命無数に含み降りそぞくかな

今年また年賀を作る月日来る無事に作れるならば幸い

そのかみは村秋祭りその頃に足袋を穿きたす思い懐かし

先に逝く同級生の名のすべて記して暮に供養のつもり

仏間から夜中にヒチリ音がする先祖の迎え近いしらせか

柿 茨城 羽生 藤 伍

散歩路の柿色づきて鈴生りし我れの頭上に降り注ぐがに  
散歩路の老人ホームで落ちた柿あつな媪早朝密かに喰み居る  
山茶花とヒラカンサスと赤い柿老人ホームも秋は色づく  
霞ヶ浦を北に進めば筑波嶺はますます高く色濃く聳ゆ  
ストロベリーファームよつちはと農家の娘ニールハウス校舎の如く

各駅停車 東京 林 宏 匡

たれもかも強顔メイクに化粧して街を闊歩す今は乙女  
いまだ吾七十四歳暑きなか靴二つを持ちて二千歩  
新幹線の各駅停車を選び乗る景色をしかと眺めんがため  
山々の低きに雲のかかるさへ心なごみて見つめあかぬかも  
灰色のむら雲かかるひとところ薄西して日は過ぎんとす

東京 藤 井 敦 子

青春の思い出のうちの空に似る今宵こよいひとりて仰ぐ空いろ  
父といふは幼き日に死にし故常にさみしき残る私  
幼き日より茶道のみちと文芸の好きな私の年々すぎる  
大学の寮生活の三年間おもひでの寮生活は今も忘れず  
幼き日父を亡くしてひとり子の私が歩いた亡母との思ひ出

老朋友 神奈川 布施 徳 郎

老朋友林檎賜へば何返さむ果てしもあらぬキヤッチボールは  
耳遠きことも愉快にあらざるや「極楽」実は「白楽」とふ駅  
これだけとは戦地に従兄の携えし「内科診療の実際」書架に黄はめる  
胃に残る潰瘍痕は戦ひの日々疎まれぬし我の十代  
夕茜にしるけき丹沢のシルエツト仰ぎつつゆく喜れ早き街

釈迦堂 東京 横 田 英 夫

釈迦堂は小さき祠と思いに仁仁王門くぐりて広き境内  
朝早き清涼寺境内はしらじらと觀光客の影もまはらに  
境内の築地の蔭にただ一樹赤々とはや色付きており  
無人駅切符もなく乗車する嵐山電車は昔のままに  
トロトロと古き街並み走り行くタイムトンネル抜けし思いす

### 春季号の原稿募集

次は4月24日発行  
予定です。

締切 4月6日厳守  
3か月あきますので、  
忘れられそうですが  
ご協力をお願いします。

募集内容はこれまで  
と同じです。ただ、  
新年度から原稿量に  
ついて、随想が2頁以  
上だったり、手書きの  
場合は負担金がかか  
ります(俳句・短歌・  
川柳は従来どおり)。

# 医芸柳壇



大阪 池田 白楽

おめでとつ医家芸術も長生きし  
初春や廿一年の幕を開け  
初春や夫婦唱和のはやり風邪  
はやり風邪婦唱夫随で仲がよい  
煩惱の百八打つた初ゴルフ

千葉 たれ 女め

ホツカイロだけはごろの友と抱き  
温泉のサル皆どこかで会つたひと  
馬鹿と鉄使いこなせぬ馬鹿となり  
脳味噌に移ってください顔の皺  
『赤魚』という切り身に金魚なりたがり

東京 小南 丁字

「鳥の巢」を聖火は翔る和平の灯  
種を時きじつくり研究ノーベル賞  
ビックシヨウ角界政界辞任劇  
計画で防げたはずの奸婦事故  
寺子屋の幼児で盛る論語塾

東京 田村 豊幸

ノーベル賞手がまわりかね家庭八パ  
気が揉めて遺言毎月書きなおす  
醒める夢いつもの人と惜しい時  
弁天に乳房を描き落選す  
捨てた恋本当は巧みに捨てられて

群馬 豊泉 清

上達を祈り書庫にも鏡餅  
願い事多いが賣銭コインだけ  
温暖化よそに暮らして寒冷化  
四日目もきちゃんと書けた日記帳  
総理なら七草ななつしと読むかも知れぬ

東京 西垣 茂

秋場所是不祥事詫ひの揃い踏み  
勝ち力士高座見上げつ引上げる  
横綱に勝つた力士は口こもり  
手をつけて礼儀の後は張手も出  
二人共鬪力士だ勝たせたい

青森 三上 忠英

給付金何時になつたら貰えるのか  
低支持の麻生解散もままならぬ  
麻生首相は血統書付きのおぼっちゃま  
聴診器首にぶらさげ医務始め  
暗い世に笑顔絶やさず生きてます